

戯曲

Global Baby Factory 2

グローバル・ベイビー・ファクトリーⅡ

2015年6月4日 版

作 鈴木 アツト

劇団印象—indian elephant—

上演時間 約110分

登場人物

- 軽部時生
- 軽部ひかり
- アナタリカ
- 馬場
- 牛山
- 羊田洋子
- 那智
- 柳生
- ナツト
- 軽部ゆかり 時生の母

注 本作品の無断上演を禁じます。上演をご希望の場合は、

info@innou.com 宛にお問い合わせください。

第1場 帝王切開

ベッドで眠っているパジヤマ姿の時生。その傍らにひかりが立っている。ひかりは、突然、生理痛の苦しさと叫び出す。

ひかり「あああー！」

時生「、、、」

ひかり「あああー！」

時生「、、、」

ひかり「あああああー！」

ひかり、少し、落ち着く。

ひかり「ふー」

時生「姉ちゃん、なんで僕にはアレが来ないのかな？」

ひかり「何、時生、アレが羨ましいの？」

時生「だって、毎月、アレが来る度に君たちは輝いて見えるから」

ひかり「輝いてる？どう輝いてる？私はいつも苦しいよ。うつつ」

時生「その苦しみが羨ましいんだ。痛みが羨ましいんだ。痛すぎて

髪を掻き毟るような」

ひかりは、また、生理痛の苦しさと叫び出す。

ひかり「あああー！」

時生「壁を殴らずにはいられないような」

ひかり「あああー！」

時生「叫びたいような」

ひかり「あああああー！」

時生「痛みと一瞬の安らぎが等間隔で交互にやってくる」

ひかり、落ち着いて、地面にペタンと座る。

ひかり「ふー」

時生「神様はなんで姉ちゃんにはアレを与え、僕にはアレを与えなかったんだろうか？」

ひかり「痛みにも耐えられないからじゃない？男はきつと生理痛にも陣痛にも耐えられない。そういう風に身体ができている」

時生「いや、違う。生理痛は陣痛の予行練習だ。小学生の時から毎月の生理で鍛えていれば僕だって陣痛に耐えられた」

ひかり「そうかな？」

時生「僕だって、僕だって、僕だって」

医師の声「(歌) はれた あさの ニワトリは」

女医師、「恋するニワトリ」を歌いながら、登場。

女医師「げんきがないの ごめんなさい

トサカ サカサカ さかだちしても

かなわぬおかたに 恋をした♪

ココ コココ ココ ココ コココ

恋は恋は恋」

女医師、緑色の手術着を着ながら、舞台上のベッドに横になっていたひかりのお腹をメスで切り裂き、中からへその緒につながったままの赤ちゃんを取り出す。外に出ると赤ちゃんは泣き始める。その赤ちゃんを、時生に渡していく。

女医師「やねの上に よびかける

わたしは ここよ ここ ここよ

だけどあの人 こつちを見ても

すぐにむきをかえる クルクルと

ココ コココ ココ ココ コココ

恋は恋は恋」

歌に合わせて、18人の代理母たちが現れて、同じく、お腹をメスで切り裂かれる。18人の赤ちゃんが出てくる。時生は右腕、左腕、首と3人ぐらいまでの赤ちゃんを抱くことができるが、どンドン持てなくなっていく。

女医師「あの人 りっぱな かざみどり

わたしは 小さい ニワトリよ

かいがらたべても てつにはなれず

かいがらはじける むねの中

ココ コココ ココ ココ コココ

恋は恋は恋

たびに出るのは ツバメたち

おけしようするのは ジュウシマツ

にわには ニワトリ おもいをこめて

ひとりでタマゴを うみました

ココ コココ ココ ココ コココ

恋は恋は恋」

女医師、代理母たち、歌いながら去る。

第2場 とあるタイの高級コンドミニアム

とあるタイの高級コンドミニアム。しかし、室内は日本のお洒落なマンションの内装と変わらないため、観客は、ここは日本だと思うだろう。赤ちゃんの泣き声が響いている。馬場、オムツを替えている。

馬場「ほら替えるぞ。ニューオムツだ。いいなあいいなあ羨ましいぞ。お父さんなんてずっと古いの穿いてるんだからね。全然持ちパンツに変化がないんだぞ。芸能界で言えば黒柳徹子だ。黒徹。パンツ持ちだ。どういう意味だ？なにに君はウンコする度に新しいオムツつけて俺は君が羨ましい。どうだ？」

赤ちゃんは泣き止まない。

馬場「ごめん。ごめん。違った？何が違った？オムツじゃないのか？」

赤ちゃんは泣き止まない。

馬場「もうすぐママが帰ってくる。君が泣き止まないとお父さんが怒られるんだぞ？いいのか？そう。よくないよ。なら教えて。何が欲しい？何？」

ピンポンとチャイムが鳴る音。

馬場「ママだよ。頼む。頼むよ。泣き止んでくれ。ベロベロベロバ

」

馬場、イナイナイバーをする。赤ちゃん、一瞬、泣き止む。
馬場、安心して、玄關のドアの方に向かうが、赤ちゃんはまた泣き出す。馬場、とりあえず、ドアの外に出ようとした途端、牛山が入ってくる。

牛山「もう、開けに来てよ！」

馬場「あ、おかえり！」

馬場は、赤ちゃんが泣き止まないのを誤魔化すように牛山にキスをして、ハグをする。牛山も男性である。

牛山「ちょっと！あの子、なんで泣いてるの？」

馬場「今、ちょうど、オムツ変えたところだから」

牛山、赤ちゃんの泣き声をしっかりと聞き、赤ちゃんを抱いて、

6

牛山「どうしたの？、、、ゲップしたいの？はい、いいよ。はい！」

牛山、赤ちゃんの背中をさすって、ゲップをさせてあげる。

赤ちゃんはゲップをして、泣き止む。

馬場「さすがママ！違うなあ」

牛山、馬場の背中を思いっきり叩いて、

馬場「痛い！」

牛山「さすがママじゃないよ。この子はずっとゲップがしたかったの！なんでわかんないの？」

馬場「わかんないよ、そんなの」

牛山「いい？エーッエーッエーッって泣いている時はゲップ。オムツが気持ち悪いはへーッへーッへーッ（へのHの音は短く）」

馬場「…」

牛山「エーッエーッエーッとへーッへーッへーッ」

馬場「…」

牛山「お腹が空いた時はネーッネーッネーッ（ネのNの音は短く）。

おならがしたい時はエアーツエアーツエアーツ。眠たい時はオアーツオアーツオアーツ。わかった？」

馬場「わかった」

牛山「本当に？」

馬場「うん」

牛山「じゃあネーッネーッネーッは？」

馬場「おむつ？いや、ゲップ？」

牛山、馬場の背中を思いっきり叩いて、

馬場「痛い！」

牛山「ネーッネーッネーッはお腹が空いた時でしょ？一番大事だよ、

これは。よく見て。ネーッネーッネーッ。泣く時に舌が見えるでしょ？おっぱいを飲むみたいに赤ちゃんが口の天辺に舌をつけるとできる音なの。ネーッネーッネーッ。ほらやってみて。おっぱい飲むみたいに」

馬場「ネーッネーッネーッ」

牛山「そう」

馬場「ネーッネーッネーッ」

牛山「赤ちゃんの気持ちになってみればわかるんだよ」

馬場「わかった」

牛山「そんなことだからゲイの両親には子供は育てられないって言われちゃうんだよ。日本に帰ってからが思いやられるよ」

馬場「ごめん」

ピンポンという玄関のチャイムの音。

牛山「誰だろう？」

牛山、インターフォンの前まで行って、スイッチを押すと、

那智、登場。

那智の声「あのう、はじめまして。今よろしいでしょうか？」

牛山「はい」

那智の声「私、ヴィデオ・ジャーナル・ユニオンという東京でドキュメンタリーを作っている会社の、皆という者なんです」

牛山「はい」

那智の声「今ですね、私共は、第二の人生タイ暮らし、という日本のテレビ番組の企画で取材をしております、というのですね、物価の安さ、気候の温暖さ、ホスピタリティから、東南アジア特にタイに移住されている日本人の方が今増えていまして、一体何がそんなに魅力的なのか？ということ番組にしたいなあなんて思っております」

牛山「はい」

那智の声「それでこういった高級コンドミニアムを調べしていたところ、偶々こちらに日本人の方が住んでる、なあんて話を聞いたもので。お忙しいところ難しいだらうなあと思っただんですが、お話だけでも伺えないかなあと思ひまして」

牛山「ああ、なるほど」

那智の声「どうでしょう？」

牛山「(馬場に)どうする？」

馬場「え？取材なんか嫌だよ。この子もいるし」

牛山「(那智に)あ、すみません。僕らここに住んでると言ってもシヨートステイなんで」

那智の声「ああ、シヨートステイ！シヨートステイの方のこともお聞きしたいと思っていました」

牛山「でも今忙しいんで。すみません」

那智の声「お話だけでも」

牛山、インターフォンを切る。

牛山「日本のテレビ番組だって」

馬場「なんで日本人が住んでるってわかったんだろ？」

牛山「近所の人が言ったんじゃない？俺たち、スーパーで買い物したりしてるし」

馬場「でもこの部屋の番号がわかったってことでしょう？セキュリティ

ィー大丈夫かな？」

牛山「ハ、ハ、」

馬場「まさか俺たちのことを取材したかったんじゃない？」

牛山「俺たちのことって？」

馬場「だからこの子のこと」

牛山「まさか」

電話が鳴る。但し、電話の相手の声は聞こえない。

牛山「はい、牛山です」

電話の相手「もしもし、羊田です」

牛山「あ、こんにちは」

電話の相手「あのう、今、馬場さんもいらっしやいますか？」

牛山「はい。いますけど」

電話の相手「突然なんですが今からそちらに伺ってもよろしいでし

ょうか？お話ししたいことがあります」

牛山「あ、はい」

電話の相手「じゃあすぐにお伺い致しますから」

牛山、電話を切る。

馬場「誰？」

牛山「ニューライフの羊田さん。今から来るって」

馬場「何で？」

牛山「さあ」

馬場「何かあったんだよ」

牛山「何かって？」

馬場「オーストラリアの夫婦のニュースがあったじゃん」

牛山「でもあれはニューライフとは関係ないんだろ？」

馬場「うん」

牛山「……」

馬場「去年の12月なんだってあの夫婦がオーストラリアに帰ったの」

牛山「やめよう、この話は」

馬場「あのニュース聞くとさ、俺、自分が嫌になるんだよね。この

子が普通で良かったって思ってる自分がいて」

牛山「病気なんか無いほうがいい。そう思うのは親として自然なこ

とだろ？」

馬場「でもさ」

牛山「俺たちは散々話し合ってサインしたじゃないか？この子がどんな障害を持って生まれて来ても引き取って育てるって。オーストラリアの夫婦とは違うよ」

馬場「サインはしたよ。その気持ちに嘘は無かったと思う。でも」
牛山「でも？」

馬場「普通で良かったって何だよ？ゲイは普通？それともゲイは普通じゃない？俺たちは普通じゃない？ダウン症は普通？それともダウン症は普通じゃない？」

牛山「……」

馬場「なのに俺、この子が普通で良かったって思っちゃったんだよ」

。ピンポンという玄関のチャイムの音。

牛山「羊田さん。早いな」

馬場「俺、開けてくる」

牛山「賢治、大丈夫？」

馬場「うん」

馬場、退場。牛山、赤ちゃんを見る。

馬場の声「え？ちよつと。何ですか？」

那智の声「あ、すみません。すみません。すみません」

牛山「え？」

柳生、那智の順で登場。馬場も戻って来る。柳生、赤ちゃんを見て、

柳生「やっぱり、赤ちゃんんだ。赤ちゃん、いたぞ」

牛山「何なんですか？あんなたち」

那智「すみません。本当にすみません。先程、ご挨拶したヴィデオ・ジャーナル・ユニオンの皆と申します。この人はヤクザみたいな顔してますがこれでも堅気です。カメラマンの柳生です」

柳生「どうも」

牛山「先程、取材はお断りしたはずですけど」

馬場「警察呼びますよ」

那智「そうなんです。もうすぐ警察が来るんです」

牛山「は？」

那智「すみません。まずお詫びします。私共、先程、第二の人生タイムらし、の取材をしたいと申し上げました。あれ嘘です。真っ赤な嘘です。本当は代理出産の取材をしております」

牛山「、、、」

那智「可愛いお子さんですね」

柳生「生後一週間ってところか」

那智「誤解してほしくないんですが、私たちのターゲットはお宅ではないんです。ニュー・ライフ・アジアン・ネットワークという会社を御存知ですよね？」

牛山・馬場「、、、」

那智「御存知のではありません。あなた方もその会社を御利用になられてそちらのお子さんを手に入れたんだから」

牛山「はい。知ってます」

馬場「それがどうしたんですか？」

那智「一昨日、オーストラリアの夫婦が代理出産で生ませた赤ちゃんを引き取り拒否したニュースがあったのは御存知ですか？」

牛山「、、、赤ちゃんがダウン症だったので引き取り拒否したっていうニュースですか？」

那智「そうです。今、日本でも大ニュースになってますがタイでも

大きく話題になっています。我々も町の方にいろいろ聞いていましたら、とあるコンドミニアムの住民の方から隣りの部屋の赤ちゃんの泣き声等の騒音がひどい。しかも赤ちゃんは少なくとも4人はいるみたいだって」

馬場「4人？」

那智「少なくともです」

牛山「うちじゃないですよ」

那智「わかっています。羊田さんという日本人が借りている部屋のことです」

牛山・馬場「え？」

那智「羊田さんを御存知なんですね？」

牛山「はい。僕たちは彼女にコーディネイトをお願いしましたから」

那智「このコンドミニアムはニュー・ライフ・アジア・ネットワ

ークの紹介でお住まいなんですか？」

牛山「はい。僕ら以外にも乳幼児を抱えた外国人がショートステイ

してると思っています。日本人は僕らだけかもしれませんが。羊田さ

んはいい人ですし、ニューライフはきちんとした普通の会社でし

た。何か問題があるとは思えないな」

柳生「ゲイのカップルに代理出産で赤ちゃんを提供している会社が

普通の会社ねえ」

那智「柳生さん」

柳生「言っとくけど俺はゲイに偏見はない。だけどこれが（赤ちゃんを見て）普通だとは全く思わないね」

馬場「同性婚は世界ではたくさんで認められています。ゲイのカップルの養子縁組だって今や普通になりつつある」

柳生「じゃあ、言い方を変えよう。自然じゃないよ。ある一定の確率でゲイが生まれてくる、これは自然だと思う。普通にある。でもそのゲイが自分たちの精子をシャッフルして人工授精で子を持

つ、これは自然じゃないでしょ？」

馬場「アフリカのある蛙は、メスだけしかいないと自然に性転換して子どもを持つたりします。御存知ないですか？」

柳生「へえ、あんたたちは蛙なのか？」

那智「柳生さん！取材に協力してもらいに来たんではしょ？（牛山と馬場に）すみません。私たちが一番恐れているのは人身売買が行われていないかということなんです」

牛山・馬場「人身売買？」

那智「もちろん、まだそうだと決まったわけじゃないんですが」

柳生「一部屋に四人。他の部屋にもいるかもしれない」

牛山「警察が来るって言うのは？」

那智「一応、私たち自身の安全にも関わるので（携帯電話を見せながら）これを鳴らしたら警察に通報してもらおうようにスタッフに待機してもらっています」

牛山・馬場「、、、」

那智「取材に協力していただけないでしょうか？」

牛山・馬場「、、、」

那智・柳生「、、、」

牛山「ちょっと二人で話して来てもいいですか？」

那智「はい。もちろん」

牛山「ここでお待ちください」

牛山と馬場、奥の寝室へ。

柳生「取材させてくれるかねえ」

那智「くれるわけないでしょ？こんな強引なやり方して」

柳生「じゃあどうすりゃよかったんだよ？代案を出せよ」

那智「丁寧にアポ取って行ってそこで拾えたことをつないでいくべ

きです」

柳生「手遅れになったらどうするんだよ？」

那智「え？」

柳生「臓器売買のブラックマーケットの話は聞いたことあるだろう？」

那智「……」

柳生「いや、もう手遅れかもしれないなあ。何人かの赤ん坊は闇で売られていったかもしれないぜ」

赤ちゃんが泣き始める。

那智「やだ。柳生さんが余計なことというから泣き始めたよ」

柳生「どら」

柳生、赤ちゃんに近づき、抱く。

那智「ちょっと止めなさいよ。よその赤ちゃんよ」

柳生「ほら。どうした？うんこか。うんこしたのか」

牛山、馬場、登場。

牛山「どうしたんですか？」

柳生「うんこしちゃまったみたいだよ」

馬場「あんた、何やってるんだ？」

柳生「いやね、この子が泣き出したから、オムツをね」

那智「すみません。悪気は無いんです」

柳生、馬場に赤ちゃんを渡す。馬場、赤ちゃんを下ろして、オムツを替える。

馬場「本当だ」

那智「なんでわかったんですか？」

柳生「泣き声でわかるんだよ。健康なうんこですわえ」

那智「本当に悪気は無いんです」

牛山・馬場「、、、」

那智・柳生「、、、」

牛山「あのう、さっきの取材の件ですがやはりお断り致します」

那智「あ、でも」

牛山「オムツのこと、ありがとうございました」

ピンポーンの音。

牛山「実は、羊田さんは今からここに来ます」

那智・柳生「え？」

牛山「話があるって」

那智「何の話ですか？」

牛山「それはわからないんですが。すみません。お帰りください」

柳生「人身売買だったらどうする？」

牛山・馬場「、、、」

那智・柳生「、、、」

馬場「有り得ないよ」

柳生「闇の子供たち。映画にもなってる。世の中には闇に売られて

いく子どもたちがいてそれを買う大人たちがいるんだ」

牛山・馬場「、、、」

柳生「こっちはインドでもタイでも代理出産について入念に取材し

てきたんだ。だけど、このコンドミニウムみたいなケースは初め

てだよ。何も無いとは思えない」

牛山「僕たちはニューライフのおかげでこの子を授かったんです」
柳生「何も出てこなかったら平身低頭謝るよ。でももし何か出てきたら」

ピンポーンの音。

牛山「具体的には何を？」

那智「ニュー・ライフ・アジアン・ネットワークの会社のことです

とか？羊田さんという方のことを教えていただきたいんです」

牛山「ではまた今度」

柳生「隠し撮りさせてほしい」

那智「は？何言ってるんですか？」

柳生「実際に使うかどうかはお前が判断しろ」

那智「隠し撮りなんて使えるわけじゃないでしょ？」

柳生「じゃあもしニューライフって会社の人身売買の証拠を掴み損

ねたらどうするんだよ？」

牛山・馬場・那智「……」

柳生「何も出てこなかったら平身低頭謝るよ」

牛山「わかりました。あなたたちは奥に隠れてください」

柳生「撮影は？」

牛山「いいです。ただし、あなたの誤解だったらデータは必ず消してください」

那智と柳生、奥の寝室へ。それを見届けた牛山、玄関へ。馬場、不安そうに赤ちゃんを抱いている。

牛山の声「お待たせしました。どうぞ」

羊田の声「すみません。急に」

牛山の声「えっえっえっえっどついうことですか？」

羊田の声「事情は中で」

牛山が羊田を連れて、戻って来る。羊田は女性である。

羊田「あら、まりあちゃん、お父さんに抱っこされて、ご機嫌でち

ゆねえ。大切にされてまちゆか？」

馬場「ほら、まりあ、羊田さんに挨拶して、ほらって、えっえっえっ

えっ。」

代理母1、2、3、4そして、妊婦アナンタリカも入ってくる。

羊田「可愛い笑顔でちゆね。おばちゃん、嬉ちいでちゆよー」

牛山「どうぞお座りください」

羊田「ありがとうございます。(タイ語で)みんな適当に座って」

羊田、テーブルに座る。代理母たち、まずアナンタリカを座らせ、自分たちもそれぞれ部屋のどこかに適当に座る。

馬場「どついうこと？」

牛山「俺だっつわかんないよ」

羊田「どなたかご来客だったんですか？」

牛山「えっ？」

羊田、テーブルの上の、女性物の何か(那智の忘れ物)を示して、

馬場「あ、それ、僕のです。すみません」

羊田「やっぱりゲイの方はお洒落ですねえ」

馬場「ありがとうございます」

羊田「お子様との生活はどうですか？」

牛山「馬場がやっと慣れて来たところですよ」

羊田「そうですね。だいぶ、お父様ぼくなられましたね」

馬場「まだいろいろ戸惑うことはあるんですが」

羊田「もちろんですよ。生後すぐは本当に大変な時期ですから」

牛山「それでこれはどういうことなんですか？」

羊田「申し上げにくいことなんですですが急いで引越していただき
たいんです」

馬場「え？」

羊田「それも今すぐ」

牛山「今すぐですか？」

羊田「はい。例のオーストラリアの夫婦の件で代理出産をよく思わ
ない住人が騒ぎ始めてるんですよ」

馬場「こちらの皆さんは？」

羊田「別のクライアントさんのお子さんと乳母たちです。彼女たち

も引越さなければならぬので」

牛山「そのクライアントさんは御一緒ではないんですか？」

羊田「少し御事情がありまして、御一緒には暮らしておりません。

その方は裕福な方ですので一人の赤ちゃんにつき、一人の乳母が
ついています」

牛山「その方々、もしかしてご夫婦ではなくお一人なんですか？」

羊田「それぞれに御事情がございますから。生物学的に子どもが持
てない方。一度にたくさんお子さんが欲しい方。私はね、どうい
う御事情であろうともその方々を信じて赤ちゃんを授かるお手伝
いをさせていただいているんです」

牛山「でも一度に四人も赤ちゃんがいるってのは」

馬場「四人じゃないよ、彼女もいたら五人だ」

牛山「その方さんは心から五人の赤ちゃんを望んでいる方なんです
か？」

羊田「もちろんです。忙しい方なのに少なくとも一ヶ月に2回は子
どもたちに会いに来てます。本当に愛しそうに赤ちゃんを抱くん
ですよ」

馬場「人身売買とかではないんですよね？」

牛山「馬鹿」

羊田「今、言ったでしょ？本当に愛しそうに赤ちゃんを抱くんです
よ」

牛山「だからと言って怪しい目的が無いとは限らないです」

羊田「自身売買が目的なら」

羊田の携帯電話が鳴る。

羊田「一人一人に乳母なんてつけないでしょう。ちょっと失礼しま
す」

羊田、電話に出る。

羊田「(タイ語で) もしもし」

電話の声「(タイ語で) 羊田さん」

羊田「(タイ語で) はい。そうですよ」

電話の声「(タイ語で) 一階のナルモンですけど」

羊田「(タイ語で) どうしたの？」

電話の声「(タイ語で) 警察が今、ドアの前に来て、開けろって」

羊田「(タイ語で) え？もう来たの？」

電話の声「(タイ語で) はい」

羊田「(タイ語で) ちょっと待ってて。すぐ行くから」

羊田、電話を切り、

牛山「どうしたんですか?」

羊田「すみません。ちょっと問題が発生しまして、すぐ戻りますので」

羊田、退場。

牛山「え? ちょっと待ってください」

牛山、羊田を追いかけて、玄関へ。やがて、牛山だけが戻って来る。

21

牛山「(馬場に) 行っちゃった」

牛山と馬場、代理母たちと目が合う。気まずい間があり、

牛山「(代理母1に) サワッディークラブ (こんにちは)」

代理母1「サワッディーカー (こんにちは)」

牛山「、、、」

馬場「、、、」

牛山「どうすんだよ、この人たち」

馬場「どうするって、待つしかないんじゃない?」

牛山「引越しの準備をして?」

馬場「ああ」

那智と柳生、出てくる。

馬場「あっ」

牛山「隠れてなくていいんですか？」

柳生「警察が来たみたいだよ」

馬場「え？そんなんですか？」

柳生「電話でそう言ってた」

牛山「タイ語わかるんですか？」

柳生「少しだけ」

馬場「へえ、すごい」

那智「警察ってことはやっぱり人身売買の可能性があるってことですか？」

柳生「わからないよ」

那智「でも引越すってことは逃げようとしたってことですよ？」

馬場「あなたが通報したんですか？」

柳生「いや俺達はまだしてない。きっとこのコンドミニアムの住人がしたんだろう。確かに、この子連れの集団は異様だよ」

牛山「他は何て言ってたんですか？」

柳生「一階にも部屋があるみたいだ。(代理母たちにタイ語で) あんたたちはみんな一緒に住んでたのか？」

代理母たち、顔を見合わせる。

アナンタリカ「(タイ語で) そうです」

柳生「(タイ語で) 1階でみんなに住んでたのか？一つの部屋で？」

アナンタリカ「(タイ語で) いや、私たちは7階で。部屋は一つ」

柳生「(日本人) 7階で一つの部屋にみんなに住んでたみたいだ。(タ

イ語で) 1階にも部屋があるのか?」

アナンタリカ「(タイ語で)二つある。五人の赤ちゃんが住んでいる」
柳生「え?アライ、クラブ? (なんだって?)」

アナンタリカ「(タイ語で) 1階には部屋が二つある。赤ちゃん五人
と乳母が五人、一緒に住んでいる」

柳生「(タイ語で) 赤ちゃん5人?」

アナンタリカ「(タイ語で) そうです」

柳生「(タイ語で) 父親は日本人か?」

アナンタリカ「(タイ語で) そうです」

柳生「(タイ語で) 全員同じ日本人の父親の子どもか?」

アナンタリカ「(タイ語で) そうです」

柳生「(タイ語で) 本当にな?」

アナンタリカ「(タイ語で) そうです」

柳生「まじかよ?」

那智「どうしたんですか?」

柳生「一階にも赤ちゃんが5人いて、全員同じ父親の子どもだって」

那智・牛山・馬場「え?」

馬場「ちよつと待って全部で何人?」

柳生「9人。彼女のお腹の子も入れたら10人」

那智「え?どういうことよ?」

牛山「ねえ、この赤ちゃんたち、本当に日本人の赤ちゃん?」

馬場「どういう意味?」

牛山「この子、金髪なんだよ。肌の色も真っ白だし」

那智「この子は、日焼けしたみたいに肌が黒い」

馬場「日本人の卵子じゃないってこと?」

柳生「(タイ語で) 本当に同じ日本人の父親の子どもか?」

アナンタリカ「(タイ語で) そうです」

柳生「全員、同じ日本人の子どもだって」

牛山「え？とじつ」とはどじつじつじつ」

馬場「世界中から集めた卵子と自分の精子を掛け合わせたってこ
と」

牛山、馬場、柳生、那智、それぞれに赤ん坊の顔をもう一度

見つめる。暗転。

第3場 夢

時生の声「姉ちゃん、姉ちゃん」

ひかり「、、」

時生の声「いた」

時生、登場。

時生「どこに隠れてた？」

ひかり「どこでじつじつ？」

時生「どこだよ」

ひかり「あんたの身体の中よ」

時生「え？僕の身体の中、何してたんだよ？」

ひかり「ねえして」

時生「え？何を？」

ひかり「いつものこと」

時生「いつもの？」

ひかり「いつもしてることよ。男の人が好きなこと。欲しいんでし

ょっ子ども

時生「、、」

ひかり「毎日しないとできないよ、子ども。はい、手伝ってあげる

から」

ひかり、時生のズボンを下ろそうとするが、

時生「いいから。見てて」

ひかり「え？」

時生、マスターベーションを始める。

時生「お、お、お、実は、僕、お、すぐいっちゃう。お、すぐいっちゃうんだよ」

ひかり「ちよっと待って」

ひかり、シャーレを持ってきて、時生の前に出す。

ひかり「はい。ここに出して」

時生「うん」

ひかり「そう」

時生「うまく入るかな？」

時生、マスターベーションを再開する。

時生「お、お、お」

ひかり「ねえ、時生はセックスはしないの？」

時生「女の人ってすぐいっちゃうの好きじゃないでしょ？僕、おっ、すぐいっちゃうし、すぐいっちゃいたいから」

時生、手を止めて、

時生「どうやったらすぐイカなくなるんだろう?」

ひかり「やってる時に難しいことを考えたら?」

時生「難しいこと?」

ひかり「数学の問題について考えるときか」

時生「ZとXの二乗かけるY!逆に興奮しちゃうよ」

ひかり「じゃあ現代思想について考えるときか」

時生「ホップス、ロック、ベンサム、ミル、カントにロールズ?ほ

んどだイかない!」

ひかり「分子生物学」

時生「え?」

ひかり「ミトコンドリアについて考えるときか」

時生「ミトコンドリア?」

ひかり「ミトコンドリア」

時生「なんだっけ、ミトコンドリアって」

ひかり「あなたの中に生きている細胞内構造物の一つ」

時生「細胞内構造物?」

ひかり、ポケットからメスを取り出して、

時生「え?」

ひかり、そのメスで時生の手首を切ると、血が噴き出す。

時生「え?、何やっつてんだよ?血だよ?血が出るよ」

ひかり「血じゃない。ミトコンドリアよ」

ミトコンドリアたちの声「太古の昔は酸素は猛毒。それでも食べた
い酸素が朝食。太鼓がなったら酸素の昼食。お腹が鳴ったら酸素

の夕食。三度の飯より酸素の夜食」

ミトコンドリア1号、2号、3号、4号、5号、太古の踊りを踊りながら、登場。ミトコンドリアはひかりの分身で、ひかりと全く同じ服装をしている。

ひかり「ある時は紐状になって、ある時は網目状になって、ある時はボールや煙突みたいな形で、ミトコンドリアは私たちの細胞の中で暮らしている」

ミトコンドリアたち「太古の昔は酸素は猛毒。それでも食べたい酸素が朝食。太鼓がなったら酸素の昼食。お腹が鳴ったら酸素の夕食。三度の飯より酸素の夜食」

時生「何のために？」

ひかり「ミトコンドリアはエネルギーの発電所。呼吸をして」

ひかり、時生にキスをする。

ひかり「エネルギーを作り出す」

ミトコンドリアたち「太古の昔は酸素は猛毒。それでも食べたい酸素が朝食。太鼓がなったら酸素の昼食。お腹が鳴ったら酸素の夕食。三度の飯より酸素の夜食」

ミトコンドリア1号「一つの細胞の中には百から二千個のミトコンドリアがある」

ミトコンドリア2号「人間の中には12万兆個のミトコンドリアがある」

時生「12万兆個？」

ミトコンドリア3号「そしてね、ミトコンドリアは母系遺伝」

ミトコンドリア4号「精子の中にもミトコンドリアはあるのに」

ミトコンドリア5号「卵子とくっついた精子由来のミトコンドリアは」

ミトコンドリア2号、4号、5号は死んでしまっ。

ミトコンドリア2、4、5号「太古の昔は酸素は猛毒、うわあああー」

ひかり「なぜか全部死んでしまっ」

ミトコンドリア1号「元々卵子の中にいたミトコンドリアだけが生き残る」

ミトコンドリア3号「卵子のミトコンドリアだけが生き残る」

ひかり「卵子のミトコンドリアだけが生き残る」

ミトコンドリアたち「太古の昔は酸素は猛毒。それでも食べたい酸素が朝食」

ひかりと、ミトコンドリア1号、3号、時生を追い詰めるように困んでいく。

28

時生「うわあー」

羊田の声「大丈夫ですか？」

ひかりと、ミトコンドリア1号、3号、退場。

第4場 8月6日朝 時生のマンション

羊田の声「大丈夫ですか？」

羊田、登場。

時生「おはよう」

羊田「バナナとヨーグルト、置いておきますね」

時生「ありがとう」

羊田「うなされてましたよ。警察に捕まる夢でも見ましたか？」

時生「違つよ。死んだ姉の夢だよ」

羊田「お姉さん、いたんでしたっけ？」

時生「話したことなかったっけ？」

羊田「いえ」

時生「僕、双子だったんだ。二卵性双生児。でも姉は僕が生まれる時に死んじゃった。お腹の中で死んでいたのか出産と同時に死んだのかわからないんだけど取り上げた時にはもう息をしてなかったって」

羊田「お姉さんの夢というのは赤ちゃんの夢なんですか？」

時生「それがね僕と同じ年の女の人なんだよ。ふとした時に姉の夢を見る。小学校の時も中学校の時も高校の時も。そんなことあり得るはずなのに姉も同じように背が伸びて髪も伸びて大人になっていつてるんだ。まるでもう一人の僕かのように。そして今ではとっても美しいんだ」

羊田「お姉さんはなんていうお名前なんですか？」

時生「ひかり」

羊田「ひかり。光と時。なんだからロマンチックな姉弟ですね」

時生「ははは。今は時だけしか残ってないよ」

羊田「……」

時生「僕も着替えておいたほうがいいね？」

羊田「そうですね。着替えておいてください。いざという時にいつでも逃げ出せるように」

時生「逃げ出す？」

羊田「はい」

時生「ナットは？ナットのところはどうなってる？」

羊田「無事ですが下手に動いて捕まりたくありませんので静かに指示を待ってと言ってます」

時生「三人は連れてくよ」

羊田「時生さん」

時生「子どもたちを置いて自分だけ逃げるの？」

羊田「、、、」

時生「、、、」

羊田、鞆から飛行機の書類を取り出して、時生に渡す。

羊田「飛行機は今日の深夜にしか出発できないみたいです」

時生、飛行機の手ケットを受け取る手が震えている。

羊田「震えてるじゃないですか」

時生「うるさいなあ」

羊田「赤ん坊を連れていけばその分だけ人目に付きませよ」

時生「ビジネスジェットの客、いちいちチェックなんかされないよ。

殺人を犯したわけじゃないし」

羊田「むしろ逆ですもんね。生命を創り出してる」

時生「(笑いながら) そうだよ。こんな大それたこと計画しながら今更怯えてどうするんだよ？」

羊田「でもフライトまで17時間以上あるんですよ？ここにだって警察が来るかもしれない」

時生「、、、」

羊田「赤ん坊を連れていけば捕まる可能性が高まります」

時生「、、、」

羊田「それに誰を連れていくんですか？時人（ときと）？時之輔（ときのすけ）？アリシア？連れていくとしても一人です」

時生「……」

羊田「……」

羊田「とりあえず朝御飯を」

時生、朝食を食べ始める。

羊田「そうだ。渡しとかなきゃ」

羊田、鞆からティッシュにくるんだタンポポの綿毛の花を取り出す。

羊田「これ」

時生「タンポポ？」

羊田「見つけました」

時生「やっぱりあるんじゃない」

羊田「すみません決めつけて。まさか10階まで届くなんて信じられなくて」

時生「どこに生えてたの？」

羊田「これがこの部屋まで届いた綿毛と同じところに生えていたものかはわかりませんけど」

時生「一つだけ？」

羊田「もう一つ、私の分も」

時生「後で一緒に飛ばそう」

時生、タンポポの綿毛の花を再びティッシュに包み、しまう。

時生「時矢が好きなんだよ。だけど飛ばすのヘタクソでさあ。こっ
やってプブूपブブूपブブूपって音だけすごいするのに全然遠くまで
飛ばせないの」

羊田「…」

時生「13人。みんな無事かな？」

羊田「保護されたのは12人ですが」

時生「アナンタリカも捕まったでしょ??彼女のお腹にも僕の赤ち
ゃんはいるから」

羊田「はい。コンドミニアムの9人とアナンタリカ。それからナル
モンが担当するクリニックの乳幼児4人。全員、無事だと聞いて
います」

時生「そういう意味では安心だよ。警察だもん。誘拐されたわけ
じゃないんだもんね」

時生、着替えを始めようとする。

羊田「奥さんには連絡しました？」

時生「いや」

羊田「何ですか?心配してるんじゃないですか？」

時生「だろうね。何度も電話がかかってきてる」

羊田「お母様には？」

時生「簡単には伝えたよ。すぐにこっちに向かうなんて言うから慌
てて止めたけど」

羊田「お父様には？」

時生「すぐに腕のいい弁護士を手配してくれたよ。僕がマカオに行
ってる間の警察とのやりとりは全部やってくれるらしい。弁護士
のこととかパッと気づくんだから流石だよ」

羊田「…」

時生「あんだけ嫌っている父親にケツ拭いてもらって恥ずかしくな
いのって顔だね？」

羊田「そんなこと思ってませんよ」

時生「親父も嬉しいんじゃないかな？どんな状況であれ僕に頼られ
て」

羊田「親馬鹿なんですね」

時生「親っていうものは愚かなものなんだよ。君も親になってみれ
ばわかるよ」

羊田「親にもいろいろいますよ。私の父親は子どもよりも酒とギヤ
ンブルが好きな典型的なダメ男でしたよ」

。ピンポンとチャイムが鳴る。

時生「誰だろう？弁護士かな？」

羊田「見てきます（行きかける）」

時生「警察じゃないよね？」

羊田「部屋に来られるということはオートロックの鍵を持つてる人
人間です？大丈夫ですよ」

羊田、部屋を出て行く。

ナツトの声「ワッディークラップ」

羊田の声「あんた何やってんの？」

ナツトの声「ごめんなさい」

時生「どうした？ナツト？」

羊田、続けて、ナツトが入ってくる。ナツトは、赤ちゃんを
背中におぶい、右腕と左腕に一人ずつ抱え、計3人を連れて

くる。

羊田「ナット!」

ナット「クン時生、ごめんなさい」

羊田「こんなに目立つ格好でここに来て。誰かに見られてないでし

ようねえ?」

ナット「怒鳴ったら赤ちゃん泣き止まないよ、はい」

と言って、羊田に右腕の赤ちゃんを預ける。

羊田「静かに指示を待てと言ったでしょ?」

ナット「でもクン時生、この子たちに会いたいんじゃないかって思
って」

ナット、そういって、時生に左腕の赤ちゃんを渡す。

時生「アリシア!」

ナット「ほら、時人、お父さんだよ」

ナット、自分が首から下げていた

羊田「こっちは?」

ナット「時之輔。ほら、時之輔、お父さんだよ」

ナット「やっぱり時生さんは最高の父親だなあ」

ナット「あの子たちとはしばらく会えないんでしょう?」

時生「すぐに取り戻すよ」

ナット「なんか父親おとうさんほくなってきたね」

時生「当たり前だよ。こんな障害、簡単に飛び越えてやるよ。ね、アリシア」

時生、赤ちゃん（アリシア）に頬ずりをしようとするが、

ナット「どうしたの？」

時生「髭ひげがアリシアに刺さりそうで」

羊田「シャワー浴びて、髭ひげ剃ひげって来よう」

時生、アリシアを羊田に預けて、退場。

羊田「ふふふ」

ナット「どうした？」

羊田「髭ひげだって。（アリシアに）時生ときせい。パパにも髭ひげ生ひげえるんでちゅね」

羊田、そう言いながら、アリシアをベビーベッドに寝かせる。

ナット「そりゃあ男おとこだもん」

羊田「あんな女の子おんなこみたいみたいな感じかんじでも男おとこなんだよなあ」

ナット、羊田の頭あたまを撫なででようとする。

羊田「何なに？やめて」

ナット「君きみに逢あいたいくいくて危あや険けん冒ぼうしてきたんだ」

羊田「は？」

ナット「洋子ようこ、愛あいしてる」

羊田「タイタイの男おとこってどうしてこう節操せつそうがないんだらう」

ナット「セツソウ？どいう意味？掃除のこと？俺、掃除、得意」

羊田「それは清掃」

ナット「洋子」

羊田「やめてよ。時生さんも、赤ちゃんもいるんだから」

ナット「大丈夫。聞こえてないさ」

羊田「ほら泣きやんだ。聞こえてる」

ナット「聞こえてるから何？」

羊田「聞こえてなくても教育上よくないの」

羊田、ナットを払いのける。

ナット「冷たくされると余計に熱くなる。ふふふ」

羊田「、、、」

ナット「冷たい君を温めたい。レンジでチンしてあげるよ」

ナット、羊田に再び迫っていく。

ナット「レンジでチンしてあげるよ」

羊田「余計な日本語ばっか覚えやがって」

羊田、鍋を掴んで構える。

ナット「洋子、なんでそんなに冷たいふりをする？」

羊田「一度したぐらいで調子に乗らないで」

ナット「あんなに感じてたじゃないか？君、寂しいじゃないか？」

羊田「、、、」

ナット「ハズバン元気？連絡してる？」

羊田「、、、」

ナット「まだセックスしてない？」

羊田「何なの？あんた」

ナット「日本では結婚すると夫は妻を抱かなくなるんだらう？おも

ちろい文化だよね」

羊田「別に文化じゃないし」

ナット「君は子ども欲しくないのか？」

羊田「もう子どもなんかできないわよ」

ナット「代理出産で作ればいいじゃないか？」

羊田「今さら、夫との間に子どもなんかいららないわよ」

ナット「俺のセイチ（精子）を使え」

羊田「は？」

ナット「俺も君の子どもが欲しい。俺のセイチを使え」

羊田「育てる甲斐性なくせに」

ナット「カワイソウ？何かワイソウ？君カワイソウ？俺カワイソ

ウ？」

羊田「可哀想じゃなくて甲斐性」

ナット「洋子、クン時生が好きなのか？」

羊田「は？何言ってるの？」

ナット「あんな蛙みたいな男」

羊田「(笑って)蛙つゝが蛙？」

ナット「蛙だよ。目がギョロギョロして蛙みたいじゃないか」

羊田「じゃああんたは何なのよ？」

ピンポンと玄関チャイムの音がする。

ナット「誰？」

羊田「弁護士よ」

ナット「は、」

羊田「開けてきて」

ナツト、洪々、玄関の方へ。羊田、身なりをさっと整える。

ナツトが、熊持を連れて戻って来る。

熊持「どーもどーも。はじめまして」

羊田「羊田洋子です。はじめまして」

熊持「弁護士熊持（くまもち）と言います。愛称はクマモンです」

羊田「、、、」

熊持「クマモンです」

羊田「冗談ですか？」

熊持「おもしろくないですか？」

羊田「、、、」

熊持「これ言ってるねえ、クマモンウェットティッシュあげるとカラオケバーのお姉ちゃんたちは大喜びなんだけどなあ、、、似てません？クマモンです」

羊田「、、、」

熊持「それで例の方は？」

羊田「今、シャワー浴びてます」

熊持「なるほど」

羊田「どうぞお掛けください」

熊持、ソファーに腰掛けながら、

熊持「素晴らしいマンションですね。ソファーのクッションもいい。さすが御曹司の住居だ」

熊持、鞆の中から、DNA父親鑑定検査キットと、ビデオカ

メラを取り出して、

熊持「早速ですが、シャワーから出たらご口腔粘膜細胞を採取させていただきます。それを私の方から警察に渡しますので」

羊田「そのカメラは？」

熊持「警察にその方の口腔内から確かに採取したと説明するためにDNA採取の一部始終をビデオカメラで撮影します」

羊田「なるほど」

熊持「まあ警察は自分たちで検査したいでしょうから出頭を求められ続けるとは思いますが」

羊田「出頭は困ります」

熊持「わかっていますよ。ただあれだけ大々的に記者会見してしまいましたからね。向こうも面子があります。人身売買じゃなかったとわかってても簡単には幕引きしてくれないでしょう」

羊田「…」

熊持「動機は何て言っておきましょうかねえ？」

羊田「動機」

熊持「はい。世界中のメディアが注目しています」

羊田「妻との間に子どもができなかった」

熊持「それでなぜ十人以上も？」

羊田「無類の子ども好きだった」

熊持「弱い。犬や猫ならわかるが赤ちゃんだから」

羊田「お金があったから何となく」

熊持「そうなんですか？」

羊田「本人はそう言ってます」

熊持「落とし所としてはやはり、会社を身内に継がせたいとか」

羊田「なるほど」

熊持「お金があったから何となく、私は好きです。けど、正直に言

つても誰も得しない。いや、何となくいいですよ。何となく百人子ども作れるなんて素晴らしいことですよ。是非応援したい。何となくで百人、私だって欲しいですよ」

羊田「いや本人の中ではあるんじゃないですか。今は明確にできないだけで」

熊持「つまらない明確さより夢のある曖昧さですなあ。百人子どもが欲しい。それも世界中の女の卵子と自分の精子を組み合わせる。これはね、王の思想ですよ。王様の発想だ。私だってその方ぐらい若くてお金があるならやってみたい。やってみたい。やってみたい！もう、3回も言っちゃうぐらいですよ。まあ、どうせやるんだったら、私ならセックスで作るでしょうねえ」

羊田「、、、、」

熊持「セックスで作ることは考えなかったんですか？」

羊田「セックス、そんなに好きじゃないみたいで」

熊持「これだけ安くない女が買える国でそっちには興味がないんですねえ。もったいない」

ナット「熊持さんはお好きなんですか？」

熊持「もちろんです。私はタイ語は女で覚えましたから。タイの女性性は脚が細くて、臭いがまたいいんですよ。私好みです」

ナット「臭い？」

熊持「嗅いだことないんですか？」

ナット「いえ、あまり」

熊持「やっぱり風土というかねえ、その土地その土地の固有なものが肌に染み込んでいくわけですよ。タイの女はねえ、個人差はありますよ、でもなんというのかなあ、パッションフルーツと唐辛子を混ぜ合わせたような甘くてスパイシーな臭いがあるんですよ、ふふふ。暑くてよくシャワーを浴びるから日本人みたいにしょっぱくないし」

時生、出てくる。

熊持「お邪魔しております」

時生「どなたですか？」

熊持「弁護士熊持です。愛称はクマモンです」

時生「、、（羊田に）どなたですか？」

羊田「採血と今後の弁護の方針についてすり合わせるために来ています。ただきました」

熊持「こう見えてできる男なんで。全力で弁護致しますよ」

時生「わかりますよ。親父と一緒に脂ぎったエネルギーを感じます。

あ、これ、褒め言葉ですよ。僕にはそういう脂ぎったエネルギーが無いから羨ましいです」

熊持「24歳でしたっけ？」

時生「はい」

熊持「これからですよ。あなたはねえ、普通じゃない。あ、これ、褒め言葉ですよ」

熊持、時生の肌を嗅ぐ。

熊持「いい匂いがしますよ。まるでお姫様のような香りだ」

時生、熊持から距離を取る。

熊持「おっと失礼。では、早速ですがDNAを採取しましょう」

時生「DNA？血を採るんですね？」

熊持、笑いながら、ビデオカメラの準備をする。

熊持「ふふふ、綿棒で頬の裏の細胞をチヨチヨっと採るだけですよ」

熊持、ビデオカメラを羊田に渡す。

熊持「全体が入るように撮ってください」

時生「カメラを見て」それは？」

熊持「採取したDNAだけ渡しても、警察はそれがあなたのものだとはわからないでしょ？」

羊田「大丈夫です。写ってます」

熊持「じゃあ行きましょう」

と言いながら、熊持は、DNA父親鑑定検査キットを開いて、中から綿棒を取り出し、時生の口のほうへ持っていく。

熊持「はい。お口開けて」

時生、口を開ける。熊持、綿棒を頬の裏にこすりつけて、DNAを採取する。それを検査キットにしまい、

熊持「はい、終わり。あっけないでしょ？これであなたのDNAを採取できました」

羊田、撮影をやめる。

熊持「あなたのお子さんたちからも同じようにDNAが採取されます。それで父親の鑑定がされるというわけです」

羊田「なるほど」

時生「まだだよ」

羊田・熊持「え？」

時生、採血キットを取り出す。

時生「もう一度、これで」

熊持「DNAを採取するのは血液じゃなくてもいいんですよ」

時生「いや血も採るんだ。血のつながりを血で証明するんだよ」

熊持「、、」

時生「お願い」

熊持「採血は医療行為です。私はできません」

時生「じゃあ自分でやるよ」

羊田「大丈夫ですか？」

時生「説明書がある。簡単採血キットって」

時生、採血キットを開けて、

羊田「羊田、写して」

羊田、ビデオカメラを回す。時生、自分で自分の腕の血を採る。

時生「真っ赤だ。これが僕の全身に流れているんだね。当たり前なのにちゃんと想像するとびっくりする」

時生、採取した血液を太陽にかざす。

時生「僕の中には12万兆個のミトコンドリアがある」

熊持「え？」

時生「いや、なんでもない。どうぞ」

時生、熊持に、自分の採取した血液を渡す。

熊持「ありがとうございます」

熊持、時生の血液をしまいながら、

熊持「そういえば新聞で読みましたよ。お子さんはスペインの卵子の子が9人、ブラジルが2人だそうですね？」

時生「、、、」

熊持「イスラエルが3人で、スウェーデン、アメリカ、オーストラリアも2人、あとはどこだったかな？」

時生「、、、」

熊持「ラテンの血に憧れがあるんですか？」

時生「、、、」

熊持「個人的にはアルゼンチンを入れて欲しかったですなあ。いいですよ、タンゴの国の女は。ははは」

時生「ペドロ・アルモドバルなんですよ」

熊持「え？」

時生「ペドロ・アルモドバル」

熊持「なんですか？それは」

時生「スペインの映画監督です。御存知ないですか？オールアバウトマイマザーとか私が生きる肌とか作った」

熊持「すみません。勉強不足です」

時生「アルモドバルの映画を勉強で見ないでください」

熊持「あ、すみません」

時生「彼の映画はね、そうだな、脳の洗濯なんですよ。脳を頭から取り出して真っ赤なスペインのワインで洗う感じ。色が違うんです。色彩感覚が全然違う。彼の眼には普通の人間とは全然違う世界が映ってるんですよ、きつと」

熊持「……」

時生「僕はね、彼のトーク・トゥー・ハーっていう映画が大好きなんです。いきなり女のヘアヌードから映画が始まるんですよ。その女の裸はね。この世のものとは思えないくらい美しいんですよ」
熊持「興味深いですなあ」

時生、赤ん坊を抱き上げて、

時生「この子、アロシアって言うんです。そのヘアヌードの女からとったんです。美しく育つようになって。スペインの卵をたくさん選んだのはアルモドヴァルに憧れたからです」

熊持「なるほど。映画の影響ですか」

時生「拍子抜けしました？」

熊持「いいえ。見たくなりましたよ。そのこの世のものとは思えないくらい美しい、スペイン女のヘアヌードを」

時生「トーク・トゥー・ハーです」

熊持「是非、見てみます。では、今日はこの辺で」

熊持、立ち上がる。

時生「今日はありがとうございました」

羊田「よろしく願います」

熊持「私に任せてくだされば何の心配もありません。では」

熊持、退場。

時生「話してるだけでウエットティッシュで手を拭きたくなる」

羊田「でも腕は確かですから」

時生、実際にウエットティッシュで手を拭こうとすると、熊持、戻って来る。時生、驚く。

時生「びっくりした」

熊持「そんなに驚きですか？」

時生「、、」

熊持「すごいスコールです。傘、お貸しいただけませんか？」

羊田「はい。今、お待ちします」

羊田、傘を探しに退場。

熊持「雨になると蛙が一斉に鳴き出しますな。そして、鳴き声が日本の蛙とは全然違う。ここがタイだと実感しますよ」

時生「、、」

熊持「ゲコーゲコーゲコー。幾種類もの蛙のオスがメスを求めて鳴き叫んでいる。ふふふ」

時生「メスは鳴かないんですか？」

熊持「御存知なかったですか？あれは求愛行動ですからね。メスは鳴かないんですよ。そもそもメスには鳴くための鳴嚢という袋がないんですよ」

羊田、戻ってきて、

羊田「これ私が使っていたやつですが差し上げますので」

羊田、熊持に傘を渡す。

熊持「ありがとうございます。それでは」

時生「ナット、下でタクシーを拾って差し上げて」

熊持「大丈夫ですよ」

時生「タクシーにお乗せするところまでですから。ナット」

ナット「はい」

熊持「わかりました。ではお言葉に甘えて」

時生「ナット、今日は戻って来なくていいよ」

ナット「あ、はい。ありがとうございます」

熊持「では」

熊持とナット、退場。

時生「スコールで蛙が一斉に鳴き出してるとさ」

羊田「そうですか」

時生「ゲゴゲゴゲゴ」

羊田「え？」

時生「ゲゴゲゴゲゴ」

羊田「どうしたんですか？」

時生「僕って蛙なんですよ？」

羊田「え？」

時生「さっきナットが言ってた」

羊田「聞こえてたんですか？」

時生「いいんだよ。僕、蛙好きだから」

羊田「…」

時生「もしも蛙になれたらなあって思う時だつてある」

羊田「え？」

時生「知ってる？アフリカのある蛙は、環境によって自然に性転換できるんだよ？」

羊田「聞いたことあります。たしかジュラシックパークでそんなこと言っていましたよね？」

時生「なんで僕は蛙じゃないんだろう？なんで人間のそれも男なんだろう？」

羊田「…」

時生「ふふふ。ねえ、なんでだと思つ？」

羊田「私も夫が私を抱いてくれなかった時、気が狂いそうになりながら、なんで私は女なんだろうって思いましたよ」

時生「そう」

羊田「はい」

時生「羊田、僕の妻も同じことを思ってるんだろうか？」

羊田「多分」

時生「…」

羊田「時生さん」

時生「何？」

羊田「本当ははっきりとした動機があるんですよね？」

時生「え？」

羊田「なんとなくじゃない。時生さんは他の人と違う色の世界を見てる。そうなんでしょ？」

時生「ねえ羊田。僕はほとぼりが冷めるまでメキシコに行つてようかなと思っんだ」

羊田「え？」

時生「アリスシアにメキシコの太陽を見せたいんだよ」

羊田「何言ってるんですか？今、赤ちゃん連れて行動してタイから

出られるわけないでしょ？」

時生「……」

羊田「メキシコで何する気ですか？」

時生「……」

羊田「もしかして」

時生「……」

羊田「ちよっと待って。まだ続ける気ですか？」

時生「ニューメキシコに良さそうな代理出産クリニックがあるんだ」

羊田「本気で言ってるんですか？」

時生「本気だよ」

羊田「タイ政府に保護されている子どもたちはいつ戻ってくるかわかりません」

時生「必ず取り戻すよ。それに僕は法律違反はしていない」

羊田「……」

時生「百人じゃ足りない」

羊田「時生さん」

時生「お金だったらいくらでもあるんだ。僕はね、千人の子どもを」

。ピンポンと玄関のチャイムの音が鳴る。

時生「来客が多い日だね」

羊田「警察ではないと思いますが」

時生「見えてきて」

羊田「はい」

羊田、退場。

ゆかりの声「深刻そうな顔で」サワディーカー」

羊田の声「お母様」

ゆかりの声「お邪魔するわね」

ゆかり、登場。それに続いて、羊田、登場。ゆかりの服は、雨なのか汗なのかわからないが濡れている。

ゆかり「時生」

時生「母さん。何で来たんだよ。来るなって言ったじゃないか？」

ゆかり「お水一杯もらってもいい？」

羊田、ゆかりにグラスに入った水を渡す。ゆかり、ゴクゴク飲んでいるが、勢いよく飲みすぎて、プハーと吐き出してしまふ。その水が時生にかかる。

ゆかり「ごめんなさい。もうわかなくなっちゃって」

羊田「タオル、持ってきます」

ゆかり「雨でビショビショになってるのに蒸し暑くて。あなたのこともグアングアン頭の中を回ってて」

羊田、タオルを取りに行く。

ゆかり「あなたのパスポート写真、外国のメディアが報道しちゃったわよ」

時生「本当？」

ゆかり「時生だけじゃなくてお父さんのことも。お父さんの会社のことも」

時生「まずいねそれ」

ゆかり「あなたがねあなたがね、、、、ゲイだって報道してるメディア

もある」

時生「…」

ゆかり「ゲイなの？」

時生「ストレートだなあ」

ゆかり「ストレートなの？ゲイなのどっち？」

時生「そっちじゃなくて。もう、どっちだっていいじゃない！」

羊田、ハンドタオルを持ってきて、時生に渡す。

時生「ありがとう」

ゆかり、顔を拭く時生をじっくり眺めながら、

ゆかり「時生、あなたゲイだから代理出産したの？」

時生「…」

ゆかり「…」

時生「羊田、ちょっと席をはずしてもらえるかな？」

ゆかり「いいから答えて」

時生「羊田」

羊田「はい」

羊田、行きかけて、

羊田「失礼します」

羊田、退場。

時生「なんか飲む？」

ゆかり「お水ちょうだい」

時生「氷入れる？」

ゆかり「うん」

時生、ゆかりのための水を用意する。

ゆかり「時生」

時生「母さんは僕がゲイなら反対なの？僕は母さんたちの望みどおり跡取りを作ったんだよ」

ゆかり「貴子さんは知ってるの？」

時生「何を？」

ゆかり「だからあなたがゲイだってこと」

時生「知ってるよ。はい」

時生、水の入ったグラスをゆかりに渡す。

ゆかり「貴子さんに問題があったわけじゃなかったのね？」

時生「、、、」

ゆかり「酷い人」

時生「何が？」

ゆかり「彼女が今どんな気持ちでいるのか？」

時生「無理矢理結婚させたのはそっちだろ？」

ゆかり「嫌なら断ればよかった」

時生「断れないさ。断る理由が無い。美しく聡明で育ちもいいお嬢さんだよ？断る理由がどこにある？」

ゆかり「愛してないなら結婚するべきじゃない」

時生「母さんは父さんを愛してた？」

ゆかり「、、、、」

時生「嫌いなわけじゃないんだよ、貴子のこと。僕に尽くしてくれ
る。僕を愛してくれる。でも、貴子の身体を見ても欲情しない」
ゆかり「セックスができなくても愛しているなら二人の子どもを持
てばよかったですよ？なのに」

時生「なのに、何？」

ゆかり「いろんな国の卵子で百人の子どもが欲しいだなんて」

時生「おかしい？」

ゆかり「普通ではないでしょ？」

時生「母さん、僕はずっと、母親になりたかったんだ。母さんが
弟たちを抱いてる時、僕は全然嫉妬しなかった。抱いてる姿を見
て、なんて美しいんだって思った。僕もあんな風に美しくなりた
いって思った。憧れだったんだよ、母親になるのが」

ゆかり「、、、」

時生「でも僕は男に生まれた。僕に生理は来なかった。自分が男っ
ていう性なんだってわかった時には僕、僕、僕、、、」

ゆかり「、、、」

時生「気付いてたでしょ？気付かないはずないよ。母さんんだか
ら。だから僕に結婚を急がしたんだ。なのに、なんで今さらまる
で知らなかったみたいにあなたゲイなの？ってどんな芝居？」

ゆかり「、、、」

時生「ねえ母さん。母さんは精子飲んだことある？」

ゆかり「はい？何言ってるの？」

時生「飲んだことある？」

ゆかり「、、、あなたには言えない」

時生「僕は飲んだことあるよ」

ゆかり「え？」

時生「安心して。他人のじゃないよ。自分のだよ」

ゆかり「、、、」

時生「安心した？」

ゆかり「安心したけど。安心していいのか？母親として」

時生「不思議だよな？男のものなのに味を知ってる男は少ない」

ゆかり「何の話なのよ？」

時生「母さんはどんな味がした？」

ゆかり「あなたには言わない」

時生「僕は、苦かった。いや味を感じる前に飲み込んだ。気持ち悪くて吐きそうになって、それでも、それでも他に方法が無かった。儀式だったんだよ。想像しなきゃいけないんだ。あいつらが僕の身体の中を昇っていく。僕の幻の子宮へ昇っていくんだ」

ゆかり「、、」

時生「代理出産で一回受精する度に僕は自分のを飲んだ。僕は僕の

中で妊娠したんだ」

ゆかり「、、」

時生「、、」

ゆかり「もしかしてこのグラスで飲んだの？」

時生「うん」

ゆかり「ストレートで飲んだの？何かで割って飲んだの？」

時生「それ重要？」

ゆかり「牛乳と一緒に飲んだらミルク精子ね」

時生「え？」

ゆかり「冗談よ。動揺しすぎてよくわからないこと口走っちゃった

わよ」

時生「もちろんストレートだよ」

ゆかり「水割りロックのストレート？ストレートなの？でもゲイな

んでしょう？」

時生「そっちじゃなくて」

ゆかり「も、もう、どっちだっていいじゃない！よくないわ！」

時生「……、そつだよね。動揺するよね。いきなりごめんね」

ゆかり「……」

時生「……」

ゆかり「あなた好きな人はいないの？」

時生「いらぬいよ。僕の子どもたちが僕の恋人だもん」

ゆかり「女は好きな男のだからやっとな飲めるのよ、ああいうのは……、
って何言わせるのよ」

時生「母さん、多分、僕はゲイじゃないんだよ。女の人を好きにな
ったことはないけど男の人にだってそんなに興味ないんだもん。

僕はただ自分自身で産みたかっただけなんだよ」

ゆかり「何回飲んだの？」

時生「え？」

ゆかり「自分の。20回は飲んだってことよね？」

時生「うんきっかり20回」

ゆかり「ああ、ああ、ああ、ああ」

ゆかり、ワナワナ痙攣しながら時生を平手打ちするのかわと思
いきや、抱き締める。

時生「え？」

ゆかり「なんてお馬鹿な子。母さんだって人生で20回は飲んでな
いのよ？」

時生「儀式なんだよ。馬鹿げてる。わかってる」

ゆかり、時生のお腹をさわる。

ゆかり「想像したの？ここで育っていく命を」

時生、うなずく。

ゆかり「そうよ。想像力が人を親にするのよ。物理じゃない、精神よ。あなたもう立派な母親なのよ。母親」

ゆかり、もう一度、時生のことを強く抱き締める。

時生「母さん」

ゆかり「あなたが子どもの頃、お母さんの化粧品使ってお化粧したことがあったの。それ自体ママ友に言わせればよくあることなのよ。男の子が口紅塗ってみたくなったりするのはね。でも私は怖かった。なんかあなたの中にお姉ちゃんが入り込んでくれないかって気がして」

時生「、、、、」

ゆかり「時生」

時生「何？」

ゆかり「今でもお姉ちゃんの夢は見るの？」

時生「見るよ。今日も見た」

ゆかり「ひかりは、元氣？」

時生「元氣だよ」

ゆかり「ごめん。何聞いてるんだろ？私」

時生「元氣だしすぐきれいなんだよ。僕が嫉妬するぐらい」

ゆかり「、、、、」

羊田、戻って来る。

羊田「戻りました」

ゆかり「これからどうするの？」

時生「とりあえずマカオに行ってカンボジアの家も見てくる」
ゆかり「何時の飛行機？」

時生「深夜だったよね？」

羊田「はい」

ゆかり「私も一緒に着いてくわ」

時生「母さんも？」

ゆかり「何かあった時、心配じゃない」

時生「もう何かあったよ」

ゆかり「それに元々お父さんの飛行機なんだから」

時生「わかったよ」

ゆかり「ふー。疲れたわ。それまで少し寝かせてちょうだい」

時生「奥の部屋使って」

羊田「(羊田に) あなた、荷物、お願い」

ゆかりと羊田、奥の部屋へ退場。

羊田、戻って来る。

時生「迷惑かけてごめんね」

羊田「とんでもないです」

時生「というわけで母親もカンボジア来るみたい」

羊田「その方が私も安心です」

羊田「わからないことがあるんです」

羊田「なんで」

羊田「

時生「ミトコンドリアは知ってる？」

羊田「ミトコンドリア？」

時生「生物の中に生きている細胞内構造物の一つだよ」

ミトコンドリア1号、2号、3号、4号、5号、太古の踊り
を踊りながら、登場。

ミトコンドリアたちの声「太古の昔は酸素は猛毒。それでも食べた
い酸素が朝食」

時生「生物のエネルギーの発電所で酸素を使ってエネルギーを作り
出すんだ」

ミトコンドリアたち「太鼓がなったら酸素の昼食。お腹が鳴ったら
酸素の夕食。三度の飯より酸素の夜食」

時生「二つの細胞の中には百から二千個のミトコンドリアがある。
そしてミトコンドリアは細胞内の核が持つ僕らのDNAとは違う、
独自のミトコンドリアDNAを持っているんだよ。ミトコンドリア
DNAは母系遺伝。精子の中にもミトコンドリアはあるのに卵子
とくつつくとなぜか全部死んでしまう。だから母系遺伝なんだ。
そしてね、このミトコンドリアDNAを調べる研究があって、つ
まり、ミトコンドリアDNAを調べれば、母親の母親のさらに母
の母の母の母の母の母の母の母の母の母の母の母の母の母の母の
母を辿ることができるんだ。するとどうなると思うっ？」

羊田「……」

時生「全ての人類の共通の母親にたどり着けるんだ。それをミトコ

時生「うん」

羊田「そういえば蛙、もう鳴いてませんね。雨上がりでしたね」

二人、窓の外を見る。時生、タンポポの綿毛の花を取り出して、ペランダに出る。

時生「羊田」

羊田「はい」

時生「16万年後だよ、想像してみて。僕がY染色体アダムになれる確率は息子の数が多ければ多いほど上がる」

時生、タンポポの綿毛の花に息を吹きかける。綿毛はパーツと、飛び散っていく。

時生「だからね、僕は千人の子どもが欲しいんだ」

綿毛は、客席のほうにゆっくりと飛んでいく。暗転。

第5場 シリラート病院 法医学博物館

ホルマリン漬けの胎児たちが並ぶ。傍には、その胎児をスケッチする医学部の学生たちがいる。胎児1、2、3は目をつぶっている。

胎児1 「シャッシャッシャッシャッ」

胎児2 「音がするね」

胎児3 「鉛筆の音」

胎児4 「紙がこすれる音」

胎児3 「たくさんの鉛筆の音に囲まれてる」
胎児1 「こいつらは誰だ？」
胎児2 「医者のお母さ」
胎児3 「医者？絵描きじゃないのか？」
胎児4 「医者なのに白い服を着てない」
胎児2 「まだ医者じゃない。卵だから」
胎児4 「鶏の卵は白い服を着るよ？」
胎児3 「見るな。眼を閉じろ、お前」
胎児4 「なんでだよ？」
胎児3 「なんでもだよ」
胎児1 「なぜ僕らを描く？」
胎児2 「見たことないから珍しいのさ」
胎児3 「珍しい？何が珍しい？」
胎児1 「あいつらと僕らは何か違うのかい？」
胎児2 「あいつらは動く。僕らは動かない」
胎児4 「あいつらは服を着ている。僕らは裸」
胎児3 「あいつらは生きています。僕らは死んでいます」
胎児2 「あいつらは生まれました。僕らは生まれてない」
胎児1 「死んでいるのが珍しいのか？」
胎児2 「いや生まれてないのが珍しいんだ」
胎児4 「生まれてないのに死ぬるの？」
胎児2 「死ぬるよ。母体の中で死ねば生まれなくて死ぬる」
胎児4 「母体って何？」
胎児3 「母親のことだよ」
胎児4 「母親って何？」
胎児1 「お母さんのことだよ」
胎児4 「お母さんって何？」
胎児2 「鶏の卵の白い服と同じで僕らを守るもの。でも、もっとや

わらかくてもっと温かいものだよ」

胎児4 「じゃあ僕らは卵の中で死んだの？」

胎児2 「そう」

胎児1 「あいつらは医者のお母さん。僕らは人間の卵」

胎児4 「ねえ、僕らのお母さんは何色だった？」

胎児1・2・3 「え？」

胎児4 「鳥の卵は白い服を着るよ。人間の卵は何色を着る？」

胎児3 「僕らと同じ色じゃないかな？つまりお母さんも僕らと同じ色をしてたんじゃないかな？見たことないけど」

胎児4 「お母さんは生きてる？」

胎児1 「多分」

胎児4 「多分って知らないの？」

胎児1 「だってずいぶん前のことだもの」

胎児4 「君はいつ死んだの？」

胎児1 「百年前」

胎児4 「百年？！百年ってどれくらい前のこと？」

胎児1 「それは3万と6千5百日前の夕方。心臓を持ってなかった僕を大人たちは墮胎した」

胎児2 「2万と9千9百日前の朝。双子の弟に肺をあげた僕を、大

人たちは墮胎した」

胎児3 「1万と2千3百前のお昼頃。病気が持ってなかった僕を

大人たちは墮胎した」

胎児4 「墮胎って何？」

胎児2 「生まれてない時に殺すことだよ」

胎児4 「ねえ、君たちはなんで目を開けないの？」

胎児1 「むしろ、なんで目を開ける？」

胎児3 「何か見たいものがあるのか？」

胎児2 「見なくても聞こえるよ。扇風機の音。話し声。外国の言葉。

ホルマリン」

胎児4、目をつぶる。

胎児4 「ホ、ル、マリン。ホ、ル、マリン。海？」

胎児2 「そう。僕らを包む永遠の海」

胎児4 「遠くで聞こえる。誰かの歌？」

誰かの歌「あったかいここはどこ？母の温もり羊水。あったかいこ

ここはどこ？母の温もり羊水」

歌いながら、ベッドで寝ているアナンタリカ、登場。

胎児1 「遠くで聞こえる。誰かの呼吸」

アナンタリカの呼吸の音が大きくなる。やがて、赤ちゃんが
生まれる。

胎児3 「あ、赤ちゃんの鳴き声だ」

胎児4 「赤ちゃんって何？」

胎児2 「生きている僕らの仲間」

胎児4 「そいつは生まれた？」

胎児1 「生まれた」

胎児4 「そいつは生きるの？」

胎児3 「多分、生きるよ。これから」

胎児4 「服は？服は着るかな？」

胎児3 「多分、着るよ。これから」

胎児4 「動く？」

胎児2 「小さく。ゆっくと少しずつ」

暗転。

第6場 シリラート病院

アナンタリカ、目を覚ます。ポーッと空っぽのベビーベッドを見つめている。ノックの音。

看護婦 「おはよう」

アナンタリカ 「おはようございます」

看護婦 「はい」

体温計を渡す。アナンタリカ、体温計を脇の下に入れる。

看護婦 「調子はどう？」

アナンタリカ 「まずまずです」

看護婦 「特に具合が悪いところは？」

アナンタリカ 「ないです」

看護婦 「それはよかったわ」

看護婦、カルテに記入する。アナンタリカ、再び、ベッドを見る。

看護婦 「後で先生の診察があるから」

アナンタリカ 「はい」

看護婦 「それで問題なければ今日退院よ」

アナンタリカ 「はい」

看護婦 「ちゃんと準備しといてね」

アナンタリカ「はい」

体温計の音がピピピと鳴る。アナンタリカ、体温計を看護婦に戻す。

看護婦「36度3分、と」

看護婦、カルテに記入する。

看護婦「そついえばさ、すごい募金が集まってるらしいじゃない？」
アナンタリカ「え？」

看護婦「あの代理母。オーストラリアのダウン症の子ども産んだ」
アナンタリカ「そうなんですか？」

看護婦「世界中の同情集めやがっていいねえ。世の中にはうまくやるやつもいればうまくやれないやつもいる」

アナンタリカ「、、、、」

看護婦「可哀想ねえ、あんたは」

アナンタリカ「私だって結構もらえるんですよ」

看護婦「結構たってたかがしれてるじゃない」

アナンタリカ「40万バーツですよ？」

看護婦「あの代理母には死ぬまで困らない分の金が集まってんの

よ？あんたはうまくやることやりそこなっただよ

アナンタリカ「でも40万バーツですよ？」

看護婦「父親がちゃんと払ってくれたら、だろ？」

アナンタリカ「、、、、」

看護婦「妊娠7ヶ月の早産で帝王切開になって、産み終えたらすぐに子どもを政府が持っていっちゃって、父親からは報酬はいつになるのか、本当にもらえるのか、わからない。可哀想だよ、あ

んたは」

アナンタリカ「……」

看護婦「……」

アナンタリカ「どこの卵なんですか？あの子の卵は」

看護婦「スウェーデンだって聞いたよ。きれいな白い肌だったね」

アナンタリカ「あの子は母親には会えるんですか？」

看護婦「ん？お前にとってこと？」

アナンタリカ「違います。本当の母親のほう」

看護婦「卵子提供者に？」

アナンタリカ「そう」

看護婦「会えないだろうねえ」

アナンタリカ「一生？」

看護婦「多分、一生。だって調べようがないじゃない」

アナンタリカ「……」

看護婦「それを知ってたら代理母はやってなかったって？」

アナンタリカ「……」

看護婦「ふふふ。もしかしたらあんたのことは訪ねてくるかもよ。

報道もされたし記録が残ってるからね」

アナンタリカ「あの子、どうなるんですか？」

看護婦「先に保護された子どもたちは児童養護施設で育てられてる

っていう話だよ」

アナンタリカ「児童養護施設？」

看護婦「孤児院だよ」

アナンタリカ「孤児院」

看護婦「あの子もそこに行くんだろうねえ」

アナンタリカ「父親は引き取りに来ないんですか？」

看護婦「政府の出頭要請にはまだ応じてない。捕まるのが恐いんで

しょ」

アナンタリカ「……」

看護婦「あんたが引き取る？」

アナンタリカ「無理ですよ」

看護婦「募金が集まるかもしれないよ、自分で引き取るって言えよ」

イチかバチかやってみたら？ふふふ」

アナンタリカ「……」

看護婦「じゃあまた後で先生の診察の時に」

看護婦、退場。アナンタリカ、再び、ベッドを見る。

柳生の声「あったよ」

那智の声「本当？」

柳生の声「うん、ここだ。アナンタリカ・シリジラワラナンタケン」

柳生と那智、登場。

柳生「すみません」

アナンタリカ「はい」

柳生「僕らを覚えてる？」

アナンタリカ「……はい」

柳生「日本人でドキュメンタリーを撮ってる」

アナンタリカ「はい」

柳生「おめでとー」

アナンタリカ「ありがとうございます」

柳生「生まれたのは一昨日？」

アナンタリカ「はい」

柳生「あなたを取材したいんだ。インタビューをしたい。いいかい？」

アナンタリカ「……はい」

那智「なんて？」

柳生「オーケーだって」

那智「じゃあ」

那智、アナンタリカのベッドの前の椅子に座る。柳生、鞆からハンディカメラを取り出す。

那智「柳生さん」

柳生「ん？」

那智「今日は様子を見るだけだって言ってたじゃないですか？」

柳生「画は必要じゃないか？やっぱり」

那智「見つかってカメラを没収されちゃ元も子もないでしょ？」

柳生「じゃあ写真を一枚。(タイ語で)写真撮ってもいいですか？」

アナンタリカ「え？」

柳生「(タイ語で)一枚だけですから」

アナンタリカ「え、はい」

那智「大丈夫？」

柳生、スマートフォンでカメラの準備をしながら、

柳生「どんな画でもいい。画で見たいんだよ。画がない報道は報道

じゃない。(タイ語で)はい、1、2、3。もう一枚。1、2、3。

はい、ありがとう」

那智、あらためてベッドの前の椅子に座り直し、

那智「じゃあ話聞いていくわね」

アナンタリカ「あなたはいくつ？」

那智「え？」

アナンタリカ「あなたはいくつ？」

那智「え？何？」

柳生「あなたは歳いくつ？だって」

那智「37だけど」

柳生「37」

アナンタリカ「ふふふ。同じだ」

柳生「同じだ」

アナンタリカ「結婚はしてるの？」

柳生「結婚はしてるの？」

那智「してない」

柳生「してない」

アナンタリカ「じゃあ子どもはいないの？」

柳生「子どもはいないの？」

那智「いない」

柳生「いない」

アナンタリカ「子ども欲しくないのか？」

柳生「子ども欲しくないのか？」

那智「ちよつと待ってよ。なんで私がインタビュ―されてるのよ？」

柳生「ちよつと待って。なんで私がインタビュ―されてるんだ？」

那智「それは訳さないでよ」

柳生「あ、ごめん」

アナンタリカ「日本人のことが知りたかった。普通の日本人のこと

が。クン時生はちよつと変わっていたから」

柳生「日本人のことが知りたかった。軽部は変わってたから」

アナンタリカ「日本語ちよつと勉強する」

那智・柳生「え？」

那智「日本語話せるの？」

アナンタリカ「ちょっと」

那智「嘘」

アナンタリカ「今日は暑いです。明日も暑いですか？多分、明日も暑いです」

那智「お、すこい」

アナンタリカ「今日は冷たいです」

那智「え？」

アナンタリカ「明日も冷たいですか？多分、明日も冷たいです」

那智「あ、違うなあ」

アナンタリカ「冷たい違う？」

那智「今日は寒いです。明日も寒いですか？多分、明日も寒いです。かな？」

アナンタリカ「冷たいと寒いは何が違う？」

那智「え？そんなこと考えたこともなかった」

柳生「(タイ語で) 実際には、さわることができるものは、冷たい。

さわることはできないものは、寒い」

那智「え？何て言ったの？」

柳生「実際に、さわることはできるものは、冷たい。さわることは

できないものは、寒い」

アナンタリカ「冷たい水。冷たいコーヒー。冷たい風」

柳生「そうそう」

アナンタリカ「寒い日。寒い冬。寒い心？冷たい心？」

那智・柳生「、、、」

アナンタリカ「冷たい心、合ってる？」

那智「そうだね」

アナンタリカ「(タイ語で) 心にはさわることはできないのに心は冷たい。寒いじゃない」

柳生「(タイ語で) 心にはさわられるんだよ。少なくとも昔の日本人は

そう考えたんだ」

那智「何て言ったの？」

柳生「(日本語で)心にはさわれるんだよ。少なくとも昔の日本人は
そう考えたんだ」

アナンタリカ「(タイ語で)私は私の赤ちゃんにはさわれない」

那智「何て言ったの？」

柳生「(日本語で)私は私の赤ちゃんにはさわれない」